ひとたびの夢

夢追い人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボーイミーツガールの小説です。

なお、内容はマジで薄くて読みごたえもない急転直下です。

目次

一日目の夢 ―――― 1

一日目の夢

◇◇◇◇

あるダンジョンに、研修中の２人と、１人の悪い噂が絶えないらしい付き添いがいます。

「みんな見て！　このアスレチックロードを踏破するとすごい景品が手に入るって！」

「ゴールするとすごい景品がもらえるんだ」

「そうみたいですね…」

すると、付き添いが楽しそうに言います

「んじゃ、２人とも行ってこようか！　２人までみたいだし」

「え、あ、あの、着いてきてくれたりは」

「しないよ！　うぇへへへへ、景品が１個、２個…」

「どうしよう。この人心配しかないけど…行くしかないのかな」
「そうですね。私から行きます」

◇◇◇◇

「やった！　景品だ！」
「このダンジョンがある限りいくらでも使える記憶封印装置…すごいお宝だ！　これは次にも期待できる！」
「さぁ早く君も！」
「僕も行くしかないのか…」

◇◇◇◇

「あ、来たんですね」
「うん。やっぱり僕も行かなきゃ行けない感じで。ところでこの…」
「「２人を消すとダンジョンコアが手に入ります」」って僕ら消されるんじゃない？」
「はい、消されますね」

「うん、僕もそう思う。」
「ところでここ、密室だし、閉じ込められてるね」
「はい、脱出できそうにもありません」
「……」
「……」
「……」
「……」
２人は床に力無く寝転がる。
――――服がだんだんと消えていく
彼は最後だからこそ心残りをしたくないと彼女に問う
「…どうせこれで終わりだからいいよ。見せてあげる」
「うん」
……。
……。
……。
。
２人は全てを受け入れたように寝転んだまま終わりを待っていた。

◇◇◇◇

ダンジョンが震え、２人の身の前の壁が唐突に壊れる

「大丈夫！　助けに来たよ！　ちょっとふざけただけで見捨ててないよ！」

「助け…？　助けっ!!?　い、今更助けなんて。　あ、あああああああ！　私は彼にあんな恥ずかしいことを！　もう死ぬからだったのに！　あああああああああああ！　は、恥ずかしいあああああああ！」

「イタッ!!　（大きな落石）」
「あ、あー。そんなにショックだったか。よし、彼女の記憶よ無くなれ～！」

◇◇◇◇

「んじゃ、君も記憶消そうか」
「はい、彼女にも悪いので」
「えいっ」
　――しかし、発動することなくさらさらと崩れていってしまった
「あ～、ダンジョンが崩壊したからかな」
「「……」」
「んじゃ、そういうことで！」
「ちょ、ま…」

◇◇◇◇

「ていうことが昔あってね」

「あの鬼メイドにそんな過去が…。ところで彼は？」
「あー、いまだにぎくしゃくしてるよ」
「もったいないですねー」
「よし！　今度はちゃんと最後まで行くイタズラを仕掛けよう！　あんな初心だとは思ってなかったしね」
「私も協力します」